

## シラーの『ドン・カルロス』について

清 水 純 夫

## 1

シラーは実在の人物ドン・カルロスをモデルにした戯曲『ドン・カルロス (Don Karlos. Infant von Spanien)』を1787年に発表した。それ以前にも「バウエルバッハ構想」, 「マンハイム構想」があり、後者は「タリーア断片」として発表されていたが、これはけっきょく未完にとどまり、完結した作品は先の1787年の初稿が初めてのものとなる。この初稿はその後何度も手直しされ、作品を引き締めるために何箇所かが削除されたりもして晩年の決定稿となるが、本論文では、この作品がシュトゥルム・ウント・ドラングから古典主義への過渡期にあたるという文学史上の微妙な位置を考慮し、古典主義の立場からの色づけがなされたと推測される決定稿ではなく、この時期の初稿をテキストにする。

レクラム版の『ドン・カルロス』についての注釈書(Erläuterungen und Dokumente)<sup>(1)</sup>によると史実のスペイン王子カルロスは大体以下のようである。

カルロスの父で、妻に死なれたばかりのスペイン王フィリップ二世は、スペインとフランスの平和のためにという政治的理由から、カルロスと結婚話のあったフランス王の娘エリーザベトと結婚した。だが彼女は作品とは全く対照的に夫フィリップのもとでスペインでも幸福だった。決して牢獄におけるような生活を送っていたのではなかった。それは王妃がフランスの宮廷から大勢の召使を連れてきていたことにもよる。カルロスはこの継母を敬い、しばしば贈物をした。二人の間に愛の関係は存在しなかった。それどころかカルロスは神聖ローマ帝国のマキシミリアン皇帝の勸める皇帝の娘アンナとの結婚に乗り気だった。彼女のポートレートをみて一目惚れしたカルロスはそのためになぞなぞドイツ語を学んだりしたほどの熱の入れようだった。

また、政治的にはカルロスはカトリックを信奉し、宗教裁判にも忠誠を誓っていた。だが、カルロスの性格は我が儘で名誉心が強く、残虐で傲慢、おまけに愚鈍だった。このようなカルロスにフィリップは頭を痛め、カルロスが門番の娘との逢引に行く途中、階段から落ちて頭に怪我をした時などは、心配して病床につきっきりであった。だが、ネーデルラントの総督になりたいというカルロスの願いを、スペインの外では彼が敵に利用される恰好の道具になりうると心配したフィリップは認めなかった。そのため、ただでさえ幼い時から父に疎んじられてき

たカルロスは父を憎み、父の可愛がっている馬を刺し殺したり、王の信任の厚いアルバ公を侮辱したりした。

その後もカルロスはことあるごとに父王に逆らい、ついには自分の部屋をいわば武器庫にしたり、極秘にネーデルラントへ行く計画をたてていることが発覚。さらに王暗殺計画の噂ももちあがる。さしものフィリップもこれ以上カルロスを好き勝手にさせておくことはできず、ついに狂人としてかれの身柄を拘束し、廃嫡した。ほどなくしてカルロスは病気になる、死去。そして王妃も彼の跡を追うように死去。

これが史実のカルロスであり、フィリップ王である。しかしシラーは史実から素材を取り入れながらも、史実のカルロスとは対照的に、彼の作品ではカルロスを善良な人間として描いた。そのため出発点から史実と異なることとなった作品の世界では、筋は内的必然性に従って、史実からは独立して、独自に展開していった。以下、その流れを辿ってみよう。

カルロスは、幼馴染みで盟友でもあるポーザ侯の影響で、以前から自由主義的な思想に共感し、「創造主から天国を学び、いつか大権を握る王として、スペインに天国を実現する」<sup>(2)</sup>ことを夢みていた。また、彼はポーザに対して、二人きりだけの時には王子と臣下という身分の差を無視して、duで呼びあうように頼む。このようなカルロスであるから、彼はフィリップの自由抑圧の暗黒政治に忠実なアルバ達にとってまことに邪魔な存在である。しかも、「彼が王座に就いた時に我々を待っているのが何かおわかりか？〔・・・〕。あの王子は〔・・・〕恐ろしいことを企んでいる。それは支配者となって、我々の聖なる信仰を無用のものにするという間違いじみた企みだ。彼は宗教を全く軽視しているのです。〔・・・〕。彼が我々の王座に好都合といえるでしょうか。あの大胆で強靱な精神は我々の国政上の路線を引き裂いてしまうでしょう。〔・・・〕。彼と王妃は一体です。二人の胸の中には、まだ隠れていますが、すでに新教徒の毒が忍び込んでいるのです。」<sup>(3)</sup>とドミンゴがアルバに警告しているように、カルロスが王になった時こそアルバ達の息の根が止められる時なのである。

このようにアルバ達とカルロスの対立は、侮辱云々の争いにみられるような性格の違いによるのではなく、強権政治に反対し、宗教的寛容を目指すカルロスとそれに反対するアルバ達のいわば思想的な対立、すなわち進歩と反動という対立なのである。それゆえ、アルバ達は自分達の身の安全のためにカルロスの抹殺をもくろまざるをえない。シラーが史実を曲げてカルロスを善良な人間にしたがゆえのアルバ達のこれまた史実とは異なることとなった必然的な対応である。彼らの対応を最も効果的にするのは、王妃がもともとカルロスの許嫁であり、二人は熱烈に愛し合っていたが、その許嫁をフィリップが強引に奪い取ったというように史実を変更することである。それゆえ、以下の王の内面も無理無く説得力をもつようになる。

王は自分のこの行為からカルロスの恨みをかっていると思い、彼に心を許さない。そればかりか王は王妃の誠を疑ってさえもいる。王妃がカルロスと密かに逢引し、不倫を働いているのではないか、王妃と自分との間にできた女の子も本当はカルロスの子ではないかとの思いに苛

まれている。カルロスもこの件では王を恨み、いまでも王妃への思いを捨てきれずにいる。

しかし、一方で彼は本気で父との和解を願っていてもいる。そして息詰まるような宮廷で有意義な活動をすることもできず、王妃への叶わぬ恋に悶々としつつ無為に日々を過ごす、ヴェールター<sup>(4)</sup>のような生活から脱するため、ポーザに勧められるままフランドル行きを王に要請するが、王はカルロスの和解の手もフランドル行きもきっぱり拒否する。カルロスに対する後ろめたいところのある王は、彼がフランドル遠征に伴い王の最強の兵を手中におさめ、実権を握ることを恐れているのである。「わしの精鋭の兵士達をお前の野心に委ねよというのか？ 刺客に短刀を委ねよというのか？」<sup>(5)</sup>。王のこの拒否は史実とは違った動機からでている。カルロスに対する王の強い不信感がみられるところである。

こうした父子の状況であるから、アルバ達の陰謀はたやすく効を奏することができる。彼らの嘘を受け入れる土壌が王の良心の疚しさの中に存在するのである。彼らの偽りの忠告で、王はいやが上にも嫉妬心を煽られる。嫉妬に駆られた王は王子と王妃への嫌疑をますます強める。しかし、その一方では王妃の無実を信じたくもある。陰謀が渦巻くこの宮廷で、王は真実を知りたいと願いつつ誰をも信じることができず、極度に孤独に陥る。そして真実の友を激しく求める。こうして、ポーザが登場するお膳立てが整う。

このように、カルロスが善良な人間として描かれたがゆえに、アルバ達との対立が不可避となり、アルバ達の陰謀が功を奏すために愛の三角関係が導入され、王の嫉妬が煽りたてられることとなり、誰をも信じられなくなった王が真の友人を求め、ポーザがそれに応えるというように、善良なカルロスからポーザまではまさに作品の内的必然の連鎖で繋がっているのである。

だが、ポーザは史実にはでてこない、完全にシラーの創作した人物である。それにもかかわらず、ポーザは戯曲の中ではいわば主人公のごとく重要な役割を演じることになるので、ポーザとは如何なる人物であるかを、以下、考察してみたい。

## 2

カルロスと竹馬の友であるポーザは、大変有能な人間であるにもかかわらず、宮仕えを好まなかった。彼の理想がスペイン宮廷に馴染まなかったからである。その理想とは、一つは、先にも引用したように、カルロスとともに「スペインに天国を実現する」こと、すなわち、「二人（ポーザとカルロス——訳者注）の友情の神々しい所産であるあの新しい国家の大胆な理想を実現するように！」<sup>(6)</sup>とあるように、カルロスが王座に就いた時に、スペインに理想的な国家を実現しようとするのである。

もう一つは、「フランドルの諸州があなた様（カルロス——訳者注）にお縋りして泣き、厳粛に援助を求めているのです。希望も無く、自由が費えてしまう恐ろしい瞬間が迫っています。自由の身に生まれついたブラバントの人々の心をドン・フィリップが残虐にえぐっている

のです。もし狂信の乱暴な手下であるアルバがスペインの法を携えてブリュッセルに進軍すれば、あの愛すべき国の命運も尽きてしまいます。カール皇帝の栄えあるお孫様にこの高貴な国の最後の希望がかかっているのです。』<sup>(7)</sup>というポーザの台詞にみてとれる。カール皇帝の孫とはカルロスのことである。ポーザはカルロスにフィリップ二世のスペインの圧政からネーデルラントの解放と民衆の幸福の実現を求めたのである。

この理想実現の第一歩として、ポーザは王妃の助けも借りて、カルロスにネーデルラントへ行くように説得する。そしてカルロスもその気になる。しかし王はカルロスのこの頼みを拒否する。そこでポーザは一計を案じ、王に近づく。そして、その機会を利用して、ポーザは王に大胆にも自分の考えを述べる。

「もっと穏やかな世紀がフィリップの時代を一掃し、もっと寛大な英知をもたらすことでしょう。その時には民衆の幸福は君主の権力と和解して歩みを共にし、つましい国家は民衆を大切にし、国家の原則も人間的なものとなるでしょう」<sup>(8)</sup>。

このように、現在のフィリップの政治を厳しく批判するポーザに対して、王は、「もし、わしが今の世紀の呪いに恐れおののいていたら、そちのいう人間的な世紀などいつ来ると思っているのだ。わしのスペインを見渡してみよ。ここでは民衆の幸福が雲ひとつない平和のうちに花咲いているのだ。この静けさをわしはフランドルの民衆にも与えるのだ。』<sup>(9)</sup>と云って、自分の政治を弁護し、その続行を主張する。すかさずポーザは、「それは墓地の静けさです。——陛下は始められたことをやり遂げる御所存ですか？キリスト教徒の成熟した変貌を、世界の姿を若返らせる遍在する春を阻止するおつもりですか？」<sup>(10)</sup>と反論する。

さらにポーザは、「ヨーロッパの全ての王達がスペインの名に敬意を払っています。彼らの先頭をお歩き下さい。陛下の御手になる一筆で、世界は新たに造り直されます。思想の自由をお与え下さい——」<sup>(11)</sup>、「こんなにも長い間、王座の権力のためにのみ増殖してきた大権を、民衆の幸福のために御使用下さいますように。人間の失われた高貴さを再び御回復下さい。民衆が再び昔と同じように王冠の目的となりますように。〔・・・〕。人間が自分を取り戻し、自分の価値に目覚め、自由の気高い誇らしげな美德が栄える時、人間の心の中に再びローマ人の血のたぎり、国民の誇りが沸き立ち、全ての人々の中に祖国が光り輝き、祖国のためになら誰でも死ぬる時、そして陛下が御自分の王国を世界で最も幸福な王国になさった時、その時は陛下の偉大な計画が熟する時であり、陛下は必然的に——その時は世界を従わせることが陛下の義務となるのです。』<sup>(12)</sup>と訴える。

このように、ポーザは王の圧政を大胆に批判し、民衆のための政治を行うよう説得し、信教と思想の自由を求める。これはカトリック以外を異端として厳しく取り締まっているスペインの宗教政策に対する公然たる挑戦である。それゆえ、このことが宗教裁判長の耳に入れば、ポーザの断罪は免れえないものであるが、ポーザを必要とする王はそれには目をつぶり、「宗教裁判には気を付けよ。そちを失いたくないからな。』<sup>(13)</sup>と忠告するるのである。

お追従を言わず、単刀直入に王を批判し、いわば意表を突くやり方で王の懐に飛び込んだポーザは、こうして王の注意を引き、王の信頼を得ることに成功する。ポーザは王に忠誠である風を装いつつ、しかし一方で王妃だけに打ち明けたように、カルロスを「陛下に背かせて」<sup>(14)</sup>ネーデルラントに派遣するという謀叛の計画を並行して進める。

しかし、ポーザはカルロスに対してはカルロスと「敵同志」<sup>(15)</sup>であるフィリップ王に接近したこの間の事情の説明もしなければ、その後も逐一情報を彼に与えることもしない。ポーザはカルロスを鞣棧敷に置くのである。そのため、ポーザを信じようとしつつも疑心暗鬼に捕らわれ、焦ったカルロスは、軽率な行動にて、王の疑惑をますます強める結果となる。カルロスにこれ以上軽率なことを行わせないために、ポーザはこの事態を予想してあらかじめ王からもらっておいた逮捕状を行使して、カルロスを逮捕する。だが事態はさらに悪化し、カルロスがポーザのどちらかの犠牲が避けられなくなる。そこでポーザは自分が犠牲になることを選び、自分が陰謀の張本人だと思わせる偽の手紙で王を怒らせ、王の命を受けた兵士の銃弾に倒れて死ぬ。ポーザの自己犠牲によりカルロスも目が覚め、自分の使命を果たそうとするが、けっきょく王に捕らわれ、宗教裁判に引き渡される。これが結末である。

このように、筋を辿っていった場合、ポーザがカルロスを鞣棧敷に置くことと、彼を逮捕する理由の曖昧さが目につく。この点に関しては、ポーザは、「そうだ、カルロス！私は自分のこの口で信義を破ったのだ。私は自分で君を破滅させることになる陰謀を企んだのだ。君の行為は明るみにでてしまった。嫌疑を晴らすには遅すぎた。陛下の復讐を一手に引き受けることしか私に残された道は無かった。だから私は君の敵になったのだ。より効果的に君の役に立てるように。」<sup>(16)</sup>と述べて、カルロスを助けるために敵に寝返ったふりをしたのだと弁解している。しかし十分説得力をもっているとは思えない。そのため、この点についての研究者の解釈も概してポーザの行為に懐疑的である。

その中であって比較的ポーザに好意的な L. Bellermann の見解は注目に値するといえる。たとえば彼は、鞣棧敷について、次のようにポーザを弁護している。

「ポーザはエボリが手文庫を盗んだことへの対抗策として、赤裸々な書簡を抜き取ってからカルロスの紙入れを王にみせる計画をたてた。これは目的に叶い、且つ、賢明に考え出されたこととはいえ、それでも何と言っても王を騙すことには違いない。[・・・]。こういう状況では、ポーザがこの嘘を一人で背負おうとするのは容易に理解できる。王子に打ち明けることは絶対にできないのだ。[・・・]。要するに、ポーザが王子に秘密を打ち明けないのは、王子のためを思っただけのことである。すなわち、もし王子が、自分の無実を証明するためには王を騙さねばならない、ということを知れば、王子は王子たる身分に相応しからぬ役を演じることになるからである」<sup>(17)</sup>。

このように、ポーザの行為はあくまで王子の手を汚させないためだと Bellermann は主張する。だが、逮捕については彼も批判的で、「王子のエボリへの告白は本当に危険を孕んでいる

ものか？もしポーザがカルロスが言った内容を知っていたらあのような行動に出たであろうか？私はこの間に対しては否と答えざるをえない」として、その根拠として、カルロスがエボリに言ったのは「二言三言、母と話をさせてくれ」という取るに足らない内容のことで、たとえ「王に密告されても王がすでに知っている域を出るものではない」し、また果たして「エボリがすぐに駈けて王に報告に行くかもわからない」し、「カルロスが安全なところへ避難するまでエボリを王に近づけないこともポーザにはたやすいことだ」し、さらに、仮にエボリが王に報告しても、「彼女に強い不信感を抱いている王」が彼女の言うことを信じるかどうかは疑問だし、それはまた「誰よりもポーザが一番よく承知しているはずだ」と述べて、カルロスの逮捕に疑問を投げ掛けている<sup>(18)</sup>。

また、G. Storz も次のように言っている。

「カルロスは友人ポーザの態度が理解できないため、レルマによって裏切りだと極め付けられた後でも、生け贄の小羊のように全くじっとしている。それにもかかわらず、ポーザは王を宥めるといふ彼にはたやすくできることもせず、反対に逮捕状を請求する。カルロスがエボリに迫るのをみた時、ポーザはそれを執行する。エボリがカルロスの秘密、すなわち、王妃に対する彼の愛を知るのを、ポーザは逮捕と死の恫喝で阻止しようとする。しかし、エボリがとくにそのことを知っていることはポーザも知っているはずである」<sup>(19)</sup>。

このように、Storz もポーザの行為の矛盾を指摘している。だが、果たして Bellermann や Storz に指摘されたこれらの矛盾は作品の欠陥であろうか。どうも筆者には、聳牋敷と逮捕の理由が曖昧ではっきりしないのは作品の欠陥でないばかりか、そこにポーザの本質についてシラーもはっきり意識していない問題点が認められるように思われるのである。以下、それを明らかにしてみたい。

## 3

ポーザは王に、「芸術家になれそうな時に、鑿に身を落とせ、とおっしゃるのでしょうか」<sup>(20)</sup>、「私は君主の臣下にはなれません」<sup>(21)</sup>と言って、王の臣下となることを拒む。ポーザは王の手足となって働き、その功績を王に賞讃されるだけでは満足できないのである。彼は自分で考え、行動し、自分の手で政治を動かし、世界を動かしたいと思う。つまり、自分が指導者となって王をも動かし、政治の実権を握りたいと思っているのである。それは以下のことから明らかである。

ポーザが実行しようとする政治の中身は、王にスペインの民主化を行わせること、そしてカルロスを密かにネーデルラントに派遣し、「ネーデルラント全土が殿下の合図で蜂起します。正義が王子によって力を得ます。武力でスペインの王座を威嚇されれば、陛下がマドリッドでは殿下に拒否なさいましたことをブリュッセルでは承認なさいますことでしょう。」<sup>(22)</sup>と王妃

に語っているように、カルロスの力を借りてネーデルラントの解放を腕ずくで王に認めさせること、その上で、「それは流血の事態には到らないでしょう。ヨーロッパが父と子の間の仲介をすることでしょう。カルロス様が恭順の意を示されれば、その謙虚さは軍隊の先頭で奇跡を引き起こすに違いありません。陛下には寛大にお許しになるか、或いは疑いから叩かれるかの二つの選択がおありになります。どうして陛下が迷われることがありましようか。」<sup>(23)</sup>と述べているように、カルロスと王との和解を成立させること、そしてその時点で、あらためて民主化されたスペインをネーデルラントに服従させることである<sup>(24)</sup>。

このように、ポーザは「フランドルの幸福について自分の確固たる理想を直接王個人に結び付け、直接王を通じて実現しようとする」<sup>(25)</sup>のである。ポーザは理想実現のためには王を欺いて利用することも平気でできる男なのである。王は彼にとり人間ではなく、単なる道具にすぎない。カルロスもそれを見抜いて、結末で王に次のように述べている。

「あなたはポーザを支配していると思いついていたようですが、彼のもっと崇高な計画の従順な道具(Werkzeug)にすぎなかったのだ」<sup>(26)</sup>。

王もポーザの道具にすぎないから、ポーザは王の気持ちには全く配慮しないのである。

そのことはポーザのカルロスに対する態度にもいえる。「カルロスを待っていては大変な遠回り」<sup>(27)</sup>と判断したポーザは、彼をも切り捨てる。カルロスもけっきょくポーザの道具にすぎない。だからポーザはカルロスを髯棧敷に置くこともできたのである。このように、ポーザは目的のためには手段を選ばないし、全体のために個を犠牲にすることも厭わない人間である。この点をカルロスは次のように嘆いている。

「ポーザにとっては一人の人間よりも何百万人の人間や祖国の方が大切でないはずがない。彼の胸は友一人には広すぎたのだ。私の幸福などは彼の愛には小さすぎたのだ。彼は自分の徳のために私を犠牲にしたのだ」<sup>(28)</sup>。

友情、すなわち個を犠牲にして民衆の、すなわち全体の幸福を実現しようとするポーザの態度は明らかに偽善である。個を犠牲にして全体の幸福などありえない。可能な限り両者の両立を追求するのがヒューマニティに叶った態度である。それを初めから放棄したポーザの自己満足的で、利己的な態度にはヒューマニティは認められない。ここにポーザの反ヒューマニティ、非人間性、エゴイズムという問題点がみられる。

しかも、ポーザの場合には、理想といっても、その中身よりは目的実現の行為そのものの方が重要である。政治の実権を握り、理想を目指して行為する中での自己実現が第一目的なのである。シラーは、ポーザの場合、「自分の理想を実現できる舞台を見つけたいという激しい憧れ」<sup>(29)</sup>がまずあり、次いでその舞台として「ネーデルラントの状態が彼に提示される」<sup>(30)</sup>と述べている。このようなポーザであるから、その理想の中身は抽象的な、曖昧なものとなる危険を免れえない。実際、彼は自分の理想が完全独立を願ったネーデルラントの史実に逆らうアナクロニズムであることにも気が付かないし、自由や幸福の理想も抽象的で、内実に乏しい空文

句のように空しく響く。

しかも、見落としてならないことは、このような抽象的理念から出発する人間は専制的な人間になる危険があるということである。それをシラーは第十一書簡で指摘し、警告する。

「どんなに無私無欲で、純粹で、高貴な人間でも、徳とそこから取り出せる幸福の観念の熱狂的な虜になると、大抵は、最も利己的な専制君主が勝手にするのと全く同様に、勝手気儘に個人を支配する危険に晒されている」<sup>(31)</sup>。

「[···]このようなどんな道徳的な理想も[···]理念にすぎない[···]。[···]。理念が、多かれ少なかれ全ての人間の心の中に存在するある種の情熱と結合した時はもっと危険である。その情熱とは支配欲・自惚れ・高慢であり、これらの情熱はあつという間に理念を掴み、理念と分かちがたく混ざり合うのである」<sup>(32)</sup>。

「私の考えでは、道徳的な事柄においては、一般的な抽象にまで高まろうとして自然な実践的感情から遠ざかることは危険を伴う。人間は、人工的に作られた普遍的理性理念の危険な導きに頼るよりも、自分の心の声や、善悪についてすでに存在する個人的な感情に頼る方がずっと確かだ。——なぜなら自然に叶っていない如何なるものも善には導かないからだ」<sup>(33)</sup>。

このようにシラーは、人間は自然を忘れて抽象的な理想・理念のみに従うと、支配欲に捕らわれたり、高慢になったり、専制的になる危険があると言っている。

これをポーズに当てはめると次のようになろう。彼の場合には自由の理想がまずあり、それを実現する舞台に彼は憧れている。働きがいのある場がどうしても必要なのである。その舞台は必ずしもネーデルラントに限らないわけだが、たまたま彼にはネーデルラントが理想実現の絶好の舞台としてクローズアップされた。それゆえ、舞台としてのネーデルラントとそこの民衆は彼の理想実現の材料にすぎない。ポーズにとっては理想実現の自己満足が第一義的要因であって、ネーデルラントの民衆の幸福という内実は第二義的要因にすぎないのである。ここに、経済的裏付けに基づいて行動するブルジョアジーと違い、観念で動く貴族の主観主義的な弱点が認められる。

ポーズの場合でも、民衆のためと言いながらも民衆が主体ではなく、貴族が指導し、幸福を与えてやるという発想からでている。だから、ここには強引に上からの改革を押し付けるといって高慢で専制的な面がみられる。民衆と対等の立場から協調しようというのではなく、一段高い所から指導するのである。このように、ポーズにとっては理想の中身より理想実現の自己満足的な行為の方が重要であり、そのため王も、カルロスも、そして民衆も彼の理想実現の手段であり、道具にすぎないのである。

しかもそれだけにとどまらず、ポーズは王の信頼をさらに確かなものにするために、事実上の息子の位置に納まろうとさえ考えているふしがある。もちろん、意識的にそうするのではないから、はっきりした発言は無いが、しかしそれを暗示するような発言はある。たとえば、ポーズが王妃に語る、「この国に新しい夜明けをもたらすことが自分にはできたであろうと思っ



ています。陛下は私に心を開いて下さいました。私を自分の息子と思うぞとおっしゃいました。」<sup>(34)</sup>という台詞の「自分の息子と思うぞ」という言葉に、ポーザの満更でもない様子が窺われる。

また、カルロスの友情を無視して、彼を聳棧敷に置いたり、逮捕したりするポーザの行為も、無意識にはあれカルロスに取って変わろうとするポーザの野望のなせるわざとも考えられる。ポーザはカルロスを裏切った風を装いながら、実は本当に裏切っているのである。もちろんポーザ自身その自覚は曖昧である。ポーザは、「不確かな賭けに全てを賭けるように、そして大胆不敵にも自信に満ちて天を相手に勝負するように私に命じたのは誰だ。全智でもないのに、僥越にも、運命の重い舵をとろうとするのはどんな人間なのだ。」<sup>(35)</sup>と述べて、自分の愚かさを悔やんだり、「君に対する履き違えた愛情に魅了され、尊大な妄想に目が眩み、この大仕事を君なしに成し遂げようとするのは、私は友情ゆえにこの危険な秘密を隠したのだ。実に軽率だった。大失態だった。」<sup>(36)</sup>と述べていることから、ポーザは自分の判断の誤りを悔いているにすぎないのであって、裏切ったという自覚は弱く、そのため良心の呵責とまではなっていないのである。

このように、カルロスに取って変わろうとするポーザの野望は、意識的か無意識的かの点で両者の間に違いはあるものの、『群盗』のフランツの野望にも譬えることのできるものである<sup>(37)</sup>。

## 4

また、愛情の点でもポーザの問題点が指摘できる。

カルロスと王の肉親の愛情に関しては、カルロスが王を恨みながらも一方で和解を終始願っているのに対し、ポーザは武力を背景に王に譲歩を迫った末の、力による王と王子の和議のことは念頭にあって、父子の平和的で自発的な和議には関心が無い。

また、カルロスを王に逆らってネーデルラントへ派遣するために、ポーザは王妃を仲間に引き入れ、しかも事が発覚した大詰めでは、「いつまでもカルロス様を愛されますようお約束下さい。世間体を憚ったり、誤った犠牲的精神から愛を否認しようなどという、できるはずもない気を起こされませんように。変わることなく、いつまでもカルロス様を愛されますようお約束していただけますか。」<sup>(38)</sup>と王妃にカルロスへの愛に忠実に生きるように訴え、王妃もそう約束するが、しかし、王妃をこのような行動へ駆り立てるポーザの念頭からは王妃に対する王の愛情は全く欠落している。だから、王妃に王を裏切るように説くポーザはまさに人間を血も肉も欠いた道具としかみることができない、人間味を欠いた人間であることがわかる。ポーザにそそのかされた王妃が、王を裏切って、カルロスの愛を受け入れる決心をしたことで、王とカルロスの和解は最終的に不可能となる。王との和解を求めてきたカルロスの一縷の望みもポーザによって断たれてしまう。

こうみてくると、民衆へのポーザの愛も疑わしいものに思われてくる。ポーザは決してネーデルラントの完全な独立を求めているのではなく、あくまでもネーデルラントを民主化されたスペインに服従させることを目指しており、民衆の幸福を真に願っているとはいえないからである。

それゆえ、ポーザの理想と行動は次のような彼の矛盾に規定されていると言えるのではないか。ポーザは思想・信条の自由、ネーデルラントの解放と民衆の幸福の実現を目指しながらも、それはあくまで民主化されたスペイン王制の支配下におけるものである。依然としてネーデルラントがスペインの植民地であるということに変わりはないのである。その意味では、ポーザは封建制度の体制内での改革者で、いわば改良主義者である<sup>(39)</sup>。

それゆえ、ポーザの理想はネーデルラントのブルジョアジーの利益とは矛盾するものである。彼らは自由な商業活動と利潤追求の理論的な支えとしてカルヴィン主義、すなわち新教の自由と、経済的自立を求めて、スペインからの独立と共和国樹立を要求しているが、それは経済の発展がネーデルラントの独立を不可避とするところまできているからである。彼らのこの要求からみればポーザの理想は不十分である。民主化されたスペイン王国による支配を求めるポーザと、独立した共和国を求める彼らとの間には大きなギャップがある。このギャップを無視して、無理矢理ネーデルラントを民主化されたスペイン王制に従属させようとするところにポーザの時代錯誤的で強権的な封建支配者的・専制君主的な一面が認められる。すなわち、理想の目的の内容の真偽を謙虚に問うことなく主観的な目的内容を絶対化し、その目的のためには手段を選ばないところに、ポーザの非人間的・利己主義的な面が認められるのである。だが、このようなポーザもスペインにとってはその封建主義の擁護者であり、スペイン王制を支える貴族であることに違いはない。

ところで、史実ではネーデルラントとの戦争によってスペインは経済的に破綻をきたし、帝国の没落を早めるきっかけになった。この点についてシラーは次のように述べている。

「フィリップがネーデルラント諸州を没落させるために使った財宝の全てが、彼ら自身をかえって富ませるのに役立ったのは、運命の悪戯だった。スペインの金の間断無い流出がヨーロッパ全土に富と贅沢を広めていた。ところがヨーロッパは増大した必需品の大部分を、当時、世界中の貿易を支配し、あらゆる商品の価値を決めていたネーデルラントの人々の手から受け取っていたのである。この戦争の最中ですら、フィリップは自国の臣下がオランダ共和国と取り引きするのを禁ずることができなかったばかりか、それを望むことすらできなかった。彼自身が謀叛人達に彼らの防衛のための費用を負担していたことになる。なぜなら、彼らを殲滅させるはずだったまさにこの戦争が彼らの商品の売れ行きを高めてしまったからである。艦隊と軍隊のための莫大な出費の大部分はフランドルとブラバントの市場と結びついている共和国の国庫に流れ込んだ。フィリップが謀叛人達を倒すために打った手は間接的に彼らの利益となった。四十年にわたる戦争が飲み込んだ計り知れぬ金額はダナイデスの桶に注がれ、底の無い深

みに消えてしまった」<sup>(40)</sup>。

それゆえ、史実でみる限り、ポーザの考えのように、一定程度譲歩して新教の自由やネーデルラントの解放を認めつつも、大枠ではスペインによる支配を維持し、無用な戦争を避ける方がはるかにスペインの利益に叶っていることがわかる。その意味では、ポーザは本来スペインの恩人ともなりえた人間である。しかし、彼のこのような考え方すら、王という立場と人間の立場との板挟みから、私情に駆られて封建制度の王としての義務を逸脱しそうになる王に代わって、当時の反動的封建勢力の暗黒政治、とくにその精神的支柱であるカトリックの宗教裁判によって危険視され、抹殺される。人格・個性が剝奪され、抽象化された存在である宗教裁判長、すなわち封建制度の権化からみれば、ポーザは既存の封建制度の憎むべき敵に他ならないのである。民主化して自己変革しなければもはやスペイン王国が存在しえない歴史的状況下において、何とか王制を存続させようと図り、王国の生き残りの唯一現実的な道を指し示そうとするポーザすら切り捨ててしまうスペインの封建制度に生き延びる術は無い。その滅亡は、まさしく史実どおり、避けられない必然的なものである。

## 5

さて、王もカルロスも民衆も、そして王妃もポーザにとっては目的のための手段にすぎなかったが、しかし、カルロスは最後にカルロスと王妃との愛に賭けるポーザの計画を内側から打ち壊し、ポーザに一矢報いることにより、結果的に単なる手段以上の存在であることを証す。もともとカルロスと王妃は相思相愛の許嫁であったが、父フィリップが強引にカルロスから奪って妻にしたのであった。だから、カルロスは自分の母になった今でも王妃に対して変わらぬ恋心を抱き、彼女を慕っている。しかも、彼は自分のその気持ちを隠すことなく王妃に直接訴える。

しかし王妃は違う。彼女はカルロスの愛を拒み、義務からフィリップを愛そうとする。そのため、カルロスを慕う自分の気持ちを抑えて自分を偽り、カルロスに自分への愛を国家や民衆に向けるように説く。

「反抗と不満と誇りがあなたの願望をこれほどまでに狂おしく母に向かわせているのです。あなたが空しく私に捧げている愛と心はあなたがいつか支配されます世界にこそ与えられるべきものです。あなたに後見が委ねられたスペインの財をあなたは浪費しているのです。愛することはあなたの大きな使命です。これまで愛は誤って母に向けられてきましたが、その愛を将来あなたのものになる国々に向けて下さい。そして良心の匕首のかわりに神となる喜びを味わって下さい。あなたの初恋の相手はエリーザベトでしたが、二度目の恋人はスペインでありますように。私よりも秀れたその恋人に私は喜んで席を譲りますわ」<sup>(41)</sup>。

このように、ここでは王妃は大変立派なことを言っているが、しかし、その後、王妃はポー

ザによって遺言として、「殿下は間もなく私ロドリゴを失います。恋人が友に取って変わります。この聖なる祭壇に、王妃の胸に、私は私の最後の大切な遺言を預けます。」<sup>(42)</sup>、「何世紀かの後に神はカルロス様のような君主を再び同じような王座に就け、廃墟から未完に終わった事業を発掘し、神の新たな寵児に同じ感激を抱かせるでしょう。」<sup>(43)</sup>と諭されると、王妃は、自分の心を偽って自分の愛に値しない王に無理に誠を尽くすよりも、今でも心から慕っているカルロスと一緒に、カルロスの始めた理想の王国建設を自分達の子孫の王達にも引き継がせて、いつの日にか実現させようという気になる。

それゆえ、ポーザが、「弦楽器の中にまどろんでいる甘い和音を耳の聞こえない買い手が本当に我が物とすることができるでしょうか。彼はその弦楽器を壊す権利を買い取ったにすぎず、銀色の色調を呼び出して、歌に恍惚として溶けてしまう技まで買い取ったではありません。」<sup>(44)</sup>と述べ、さらに、注(38)ですでに引用した「いつまでもカルロス様を愛されますようお約束下さい。」云々という台詞で王妃を説得すると、王妃は、「わたしの愛を裁くのは永久に私の心だけとすることをお約束します。」<sup>(45)</sup>と述べて、これからはカルロスへの愛に忠実に生きることを約束する。

このように、ポーザに説得されると王妃はいともたやすく王から王子に心変わりをしている。たやすく心変わりできるところに王妃の人間的な弱点が見て取れる。

世間体を憚ってカルロスを拒否し、王を愛そうとした王妃のこれまでの態度は、封建的な「掟」・道徳・秩序に受動的な王妃の主体性の無さを示している。彼女はカルロスに、以前、偉そうに説教したが、それは口先だけのことにすぎなかったのである。ポーザに諭され、道徳・秩序から自立した王妃は、偽りの愛を投げ捨て、真の愛に生きようとするが、それはしかし夫である王に対する裏切りという道義に反する行為である。ポーザの思想に共感し、彼に指示されるまま夫を裏切り、反乱を煽動し、資金援助も惜しまない王妃は、ポーザ同様、身勝手、目的のためには手段を選ばない、すなわち、大義のためには夫たる王をも裏切れる女性なのである。

それとは対照的に、王妃に裏切られるフィリップ王の愛は、猜疑心に捕らわれ、苦悩する王の姿を通して、哀れみを誘うように肯定的に描かれている。

それゆえ、王妃に対してシラーは明らかに一線を画していると思われる。王妃はシラーが理想とする女性像には程遠い人物なのである<sup>(46)</sup>。

カルロスへの愛をもち抑えることをしなくなった王妃は、カルロスに向かって、「もう見栄は張りません。世間体を恐れもしません。見ての通り、今、あなたと二人だけでいても怖くはありません。友のように大胆になろうと思います。胸のうちをお聞かせしますわ。ポーザ殿は私達の愛を徳に叶っているとおっしゃいました。私もそう思います。そしてもはやこの心を」<sup>(47)</sup>と言いかけると、ポーザの犠牲死で自分の使命に目覚めたカルロスはそれを遮って、次のように述べる。

「私は長い重苦しい夢をみていました。あなたを愛してきましたが——今、目が覚めました。〔・・・〕。あなたはもはや私の激情を恐れる必要はありません。嵐は通り過ぎました。清らかな炎によって私は浄化されました。私の激情の住処は死者の墓場の中です。この世のどんな欲望もこの胸を開くことはもはやできません。〔・・・〕。あなたを手に入れることよりもっと崇高で望ましい宝のあることがやっと私にもわかりました。〔・・・〕。あなたは我々の盟約を打ち明けたただ一人の方です。その名において、あなたは私にとっていつまでも世界中で最も大切な方であることでしょう。昨日までは私の愛を他の女性に捧げることなどできなかったように、私の友情などをあなたに捧げることはできません。けれども、もし神の摂理により私が王位に就くことになったならば、亡くなられた王の妃としてあなたを畏れ敬います。また王妃にお戻り下さい。王は息子を失いましたが、あなたは御自分の義務にお立ち返り下さい」<sup>(48)</sup>。

皮肉にもポーザの自己犠牲により、カルロスは愛の諦念に目覚め、王妃を諦める決心をしたのである。カルロスのこの決意により、王妃とカルロスの子孫による理想の王国建設というポーザの夢は水泡に帰すことになる。今やカルロスは王妃への愛をスペインやネーデルラントの民衆への愛に昇華しようとする。他の女性に鞍替えするなどということは今のカルロスからすればとても考えられないので、最愛の王妃を拒否するということは王家の存続のなくなることを意味するととることができる。自分の代で王家を終わらせ、後は民衆に全てを委ねる覚悟とみられる。民衆が実質的に主人公になることをカルロスは求めるのである。そして、これが史実に叶った、王家のとるべき態度である。独立したネーデルラントは王や貴族という指導者がいなくても立派に成り立つことを民衆はその後の歴史を通して実証した。

「当時よその土地で知恵者、練達者として通っていた多くの人びとの目には、新国家の仕組みは不可能事と映じた。いったいどうすれば小売商人とか塩商人、漁夫やローソク製造人といった連中の混成集団が、王の指導、あるいは貴族の指導さえも待たずに、自ら治めてゆくことができるのか。ところがオランダ人たちはいささかも動じなかった」<sup>(49)</sup>。

「市政府における権力がカトリックの執政の手からプロテスタントのエリートの手へと移るにおよんで、新興の商人階層が、次第に政治の舞台の前面へとその姿を現わしはじめた。〔・・・〕。〔・・・〕この『商人階層の独裁』こそが、新共和国をして、その経済とその政策をして、いまだ、おおかたのところ君主の支配のもと、封建階層の保持する王朝的価値体系に従う世界にあって、独特なものたらしめたのである」<sup>(50)</sup>。

このように、後の歴史をみる限り、カルロスは歴史を先取りするかのようになり、歴史に叶った進歩的な考え方をしている。その点では彼は古い封建主義の殻を突き破っているのである。

しかも、民衆の幸福を願ったり、ポーザとも王子と臣下という封建主義の要ともいべき身分の差を無視して、兄弟のように対等になることを求めて du で呼び合うなど彼の個人的な人柄なども考え合わせると、カルロスのこの姿勢は市民階級の立場に立っているともいえるほど進歩的であるといえる<sup>(51)</sup>。

さらに、カルロスは、先に引用したように、「もし神の摂理により私が王位に就くことになったならば、亡くなられた王の妃としてあなたを畏れ敬います」と述べていることから、王がこの世を去った後でも王との和解を望んでいると思われる節がある。このことはポーザとの最後のやりとりにも見て取れる。カルロスはポーザに、「私は君を父上のところへ連れていこう。二人して父上のところへ行こう。そして、お父上、これは一人の友がその友のためにしたことです、と私は言おう。父上も感動されることだろう。信じてくれ！わたしの父にも人間の心が無いわけではない。きっと感動されることだろう。父上の目は熱い涙で溢れ、君と私を許して下さいさるだろう。」<sup>(52)</sup>と語っている。

王との和解を求めるカルロスのこの気持ちは彼の諦念と深くかかわっている。王妃を諦め、王家の子孫をつくることを諦めることは、事実上、王制の終焉を願うカルロスの気持ちの現れである。恐らくカルロスはネーデルラントから帰国した後、腕ずくでフィリップを退位させ、自分の民衆の幸福のため、ポーザの自己犠牲に倣って、自分は無私無欲の諦念に徹して、実権を民衆に譲り、王制を形骸化させ、その上で退位した王に父と子としての和解を求めようと考えていたのではないと思われる。すなわち、王もカルロスもどちらも王位を捨ててこそ初めて父子としての二人の和解の道が開けるといえるものである。だから、シラーは、宗教裁判長に秘密にしてまでもポーザの危険思想に寛大であろうとしたフィリップの、史実からは絶対に出てこない姿勢を通して、フィリップも市民階級に近づいていることを仄めかしているのであろう。父子の和解の可能性が期待できるように手が打たれているのである。

しかし、このようにいわば市民階級の立場に立ったカルロスの考え方は封建主義に抵触するもので、身の破滅は不可避である。けっきょく、結末に描かれている如く、カルロスも、ポーザ同様、封建主義の権化ともいべき宗教裁判の手に引き渡され、抹殺されることになる。

歪んだ性格ゆえに父フィリップに葬られる史実のカルロスは、作品の中では、善良な人間であるがゆえに封建制度の非人間性とぶつかり、その犠牲になるように改作されている。こうして、二人のカルロスの内実が全く異なるにもかかわらず、父に殺されるということでは作品のカルロスも史実のカルロスも同じ結末を迎えることとなり、史実の大枠は守られた。

## 6

さて、最後にポーザを描いたシラーの意図と作品の統一の問題について考察してみよう。

史実に無いポーザという人物を何故シラーは描いたのか。しかもネーデルラントが共和国として独立した史実をシラーは知っているのに、ポーザの王国実現の理想は史実に反するばかりかアナクロニズムであることを承知の上で、何故シラーはポーザをそのように描いたのか。つまり、シラーは初めからポーザを批判的に描いていたことになるが、それは何故か。こういう疑問が挙げられるが、それについては以下のように答えられないだろうか。

シラーは十六世紀のスペインを引き合いに出して、実は十八世紀末のドイツの王制の枠内での進歩的・改革派貴族のもつ弱点と抽象的理念のもつ危険を、ポーザの道義的な荒廃を通して暴露し、共和制の必要を訴えているのだと。カルロスに対する罪滅ぼしとしてのポーザの犠牲死は、このような存在としてのポーザに対するシラーの断罪なのである。彼の死は内面的勝利であるどころか完全な敗北なのである。

さらに、市民階級の力が弱く、封建主義が根強く残っている遅れたドイツでは、進歩的貴族と市民階級が協力していくことが現実的な社会変革の道であり、そのことがまた調和を美德とするドイツ古典主義の理念の根底にあることからすれば、ポーザへの懐疑からシラーが古典主義の理念に目覚めつつも、同時にすでにその理念に懐疑的になっているともいえるのではないか。

また、ポーザの犠牲死によってカルロスが無私無欲の諦念に目覚めることは王制の自己否定であり、それは取りも直さず市民階級を主人公とする共和制に移行することを意味するし、また王と王子の父と子としての和解は王制の彼方においてのみ可能で、これらはいずれも市民階級の社会が前提とされている。

以上のことから、この段階ですでにシラーは、貴族階級の立場ではなく、市民階級の立場に立っているということができよう。これが作品分析からでてくる筆者の結論である。

また、作品の統一の問題では、当初の「バウエルバッハ構想」では、素材となった Abbé de St. Réal の作品に倣って、王妃とカルロスの恋の物語が中心で、カルロスに重きが置かれており、続く「マンハイム構想」でもシラーは「ある王家の家庭悲劇」<sup>(53)</sup>を描こうとしたが、ここでは中心はカルロスから王に移っていたし、さらにポーザを書き進めるうちにシラーはだんだんこの人物にのめり込み、それにつれて作品は政治ドラマとしての傾向を強めていき、そのため、完成されたとはいえこの作品は統一とまとまりに欠けているという指摘が多くなされている。それに対して、最近では H. Koopmann のように、その見解に反対してまとまりのあることを強く主張する見解もある<sup>(54)</sup>。筆者としては、今まで述べてきたように、ポーザの行動が筋の骨格を成す父子の対立を激化させたり、王妃の愛の変節を引き起こす原因となっているが、その結果は全てカルロスの身に降りかかっていること、さらにはカルロスが王妃への愛を克服し、自分の使命に目覚め、ついには市民階級の立場に立つまでが描かれており、彼の成長に主眼が置かれていること、その点ではポーザもカルロスのこの成長に影響を与える脇役にすぎないことなどから、この作品では表題通りカルロスが主人公だと断言したい。さらに、宗教裁判については「残酷で偽善的な宗教裁判長」<sup>(55)</sup>というシラーの規定や、同じく Reinwald 宛の手紙の中で述べられている、「宗教裁判を描写するなかで、汚された人間性の仇を討ち、その穢れを公然と弾劾することを、私はこの戯曲における自分の義務にするつもりだ。」<sup>(56)</sup>というシラーの初期の批判的な態度が最後まで貫かれていることなどを考え合わせると、たとえ成立史的にシラーの関心が愛の問題から政治の問題に移っていったにしても、Koopmann とは違った

理由からではあるが、筆者はこの作品にカルロスを主人公とする反封建主義的な政治的ドラマとしてまとめると統一が認められると結論づけたいのである。

### 注

テキストは Schiller: Don Karlos. Infant von Spanien. Erstausgabe 1787. Nationalausgabe. Bd. 6, Hrsg. von Paul Böckmann u. Gerhard Kluge. Weimar 1973. を使用。以下、N. A. と略す。

- (1) Erläuterungen und Dokumente zu Schiller, „Don Carlos“. Hrsg. von Karl Pörnbacher. (Reclam). Stuttgart 1987. S. 90-101.
- (2) N. A. Bd.6, S. 17.
- (3) *ibid.*, S. 123ff.
- (4) 『若きヴェールターの悩み』の主人公ヴェールターも、俗物ばかりの息詰まるような世界の中で、ロッセへの叶わぬ恋に煩悶し、無為な日々を送っているが、ついに現状打開のために町へ出て公使館勤務に賭けてみようかと決心する。この点ではヴェールターとカルロスの状況は似ているといえよう。
- (5) N. A. Bd. 6, S. 72.
- (6) *ibid.*, S. 268f.
- (7) *ibid.*, S. 16.
- (8) *ibid.*, S. 189.
- (9) *ibid.*, S. 189.
- (10) *ibid.*, S. 190.
- (11) *ibid.*, S. 191.
- (12) *ibid.*, S. 192f.
- (13) *ibid.*, S. 194.
- (14) *ibid.*, S. 207.
- (15) *ibid.*, S. 23.
- (16) *ibid.*, S. 294.
- (17) Bellermann, Ludwig: Schillers Dramen. Erster Teil. 5. Aufl. Berlin 1919. S. 268f.
- (18) *ibid.*, S. 275.
- (19) Storz, Gerhard: Der Dichter Friedrich Schiller. 2. Aufl. Stuttgart 1959. S. 141.
- (20) N. A. Bd. 6, S. 181.
- (21) *ibid.*, S. 182.
- (22) *ibid.*, S. 207.
- (23) *ibid.*, S. 208.
- (24) G. Storz もこの箇所注目して、「世界を服従させるのが陛下の義務」というポーザの台詞はこれまで見落とされてきたが、ポーザの「反宗教改革のテロに符合」していて、「ポーザは未来の幸福のために、宗教裁判長が既存の体制維持のために実行していることを、要求するのである」と述べている。しかし「反宗教改革のテロ」というよりは民主化された封建主義的王国による新たな植民地支配を狙ったものだと思われるのである。  
G. Storz: a. a. O., S. 146.
- (25) Schiller: Briefe über Don Karlos. Sechster Brief. Schillers Werke. N. A. Bd. 22, Vermischte Schriften. Hrsg. von Herbert Meyer. Weimar 1958. S. 156.



- (26) N. A. Bd. 6, S. 302.
- (27) Schiller: Briefe über Don Karlos. a. a. O., S. 156.
- (28) N. A. Bd. 6, S. 243.
- (29) Schiller: Briefe über Don Karlos. Dritter Brief. a. a. O., S. 147.
- (30) *ibid.*, S. 147.
- (31) Schiller: Briefe über Don Karlos. Elfter Brief. a. a. O., S. 170.
- (32) *ibid.*, S. 171.
- (33) *ibid.*, S. 172.
- (34) N. A. Bd. 6, S. 269.
- (35) *ibid.*, S. 266.
- (36) *ibid.*, S. 294.
- (37) 『群盗』では、フランツは奸計を用いて父を騙し、実の兄を勸当させ、自分が跡取りの地位に就いた。
- (38) N. A. Bd. 6, S. 272.
- (39) H. Koopmann も、「ポーザの政治的な構想はフィリップへの反逆ではなく、カルロスを通じて当時の世界を改革することである。ポーザはカルロスに全ての希望を託している。このようにみれば、ポーザの行動は全て理解できるし、又、それは決して革命的ではない。」と述べている。  
Koopmann, Helmut: „Don Carlos“. In: Interpretationen. Schillers Dramen. Hrsg. von Walter Hinderer. Reclam. Stuttgart 1992. S. 197.
- (40) Schiller: Geschichte des Abfalls der vereinigten Niederlande von der spanischen Regierung. Sämtliche Werke. Bd. 4, Hanser. München 1966. S. 40.
- (41) N. A. Bd. 6, S. 48f.
- (42) *ibid.*, S. 268.
- (43) *ibid.*, S. 269.
- (44) *ibid.*, S. 272.
- (45) *ibid.*, S. 272.
- (46) B. v. Wiese は、「王妃はのちにシラーが『優美(Anmut)』と名付けたものをまさに体現している」と述べているが、しかし、これは王妃の王に対する裏切りを見落としているか無視した見解とわざわざをえない。  
Wiese, Benno von: Schiller. Stuttgart 1963. S. 269.
- (47) N. A. Bd. 6, S. 335.
- (48) *ibid.*, S. 336f.
- (49) C. ウィルソン・著、堀越孝一・訳『オランダ共和国』(世界大学選書)、平凡社、1971年、41頁。
- (50) 同上 63頁。
- (51) U. Wertheim も王とカルロスの「世代の対立」の中に「封建制の世界」と「市民の世界」の対立が描かれていると述べているように、カルロスを市民とみなしている。彼は、さらに、スペインの専制宮廷でただらとした生活を送るカルロスをヴェールターに譬えてもいる。  
Wertheim, Ursula: Schillers „Fiesko“ und „Don Carlos“. Beiträge zur Deutschen Klassik. Bd. 7, Aufbau-Verlag Berlin u. Weimar 1967. S. 147ff.
- (52) N. A. Bd. 6, S. 298.
- (53) Brief an Dalberg, den 7. Juni 1784.  
(Schillers Werke. N. A. Bd. 23, Briefwechsel. Schillers Briefe 1772-1785. Hrsg. von Walter Müller-Seidel. Weimar 1956. S. 144.)

(54) H. Koopmann は、家庭の悲劇に父が同時に王であるという事情が加わることで、家庭と政治が結合されるとして、統一を主張している。

H. Koopmann: a. a. O., S. 186.

(55) Brief an Rheinwald. den 27. März 1783. (a. a. O., S. 75.)

(56) Brief an Rheinwald. den 14. April 1783. (a. a. O., S. 81.)